

六道迎鐘ろくだうのむかひかね

〔珍皇寺ちんくわうじ〕にあり。毎年七月九日十日盂蘭盆会に出し、諸人に撞しめ、聖靈迎鐘と称す。此鐘は慶俊僧都けいしゆんこれを鑄て土に埋しめ、三箇年を経て掘出すべきよし寺僧に約して入唐し侍りぬ。其後別当にてありける法師、二箇年を待ずして掘出し撞ける、其声こそ唐土もろこしに聞へけれ、慶俊僧都大に嘆じて曰、此鐘人の撞ざるに自然に鳴ざんと思ひつるに、早掘出す事の口惜さよと宣ひける。件の僧都は弘法大師の祖師なりとぞ、古事談或は今昔物語にも見へたり。今も此鐘は遠境に響く事他に並びなし、希代の靈器なり〕

今昔物語云 孟蘭盆の日、まづしぎ女の、祖のため着たりける薄色の衣を盆に入蓮葉をうへに覆ふて、愛宕の寺に持

参りてふし拝み泣く去にけり。人あやしみてこれを見れば、蓮葉にかくぞ書たりける。

たてまつる蓮のうへの露ばかりこれを哀と三世の仏も

城東寺じやうとうじ

〔建仁寺町松原の南にあり。本尊丈六薬師仏ちやうろくを安置す、伝教大師でんけうの作なり。応仁の乱後此尊像破壊して纔に御首許残りありしを、後世作り添て今半丈六の像となし小堂にあり。初めは天台宗、応仁年中に禅宗となりて、南禅寺楞嚴院りやうごんの兼帯所となる〕

平教盛卿家たひらののりもりきやうのいへ〔五条大黒町の北の町を北御門町といふ、是六波羅館の北門なり、委くは前編に見へたり〕

平家物語云、宰相教盛さいしやうのりもりと申は、入道相国の御弟、宿所は六波羅惣門の脇におはしければ、門脇の宰相さいしやうとぞ申ける。

上行寺じやうぎやうじ〔五条建仁寺町の東にあり、法華宗。開基は日秀上人にちしやう、本願は織田左京助信定のぶさだ、慶長十六年の建立なり。初

め此地に住し日経上人他宗と法論し騒動に及ぶ。是によつて公務より、慶長十四年二月廿日日経上人の徒弟五人と共に六条河原に於て■刑に行はる、故に■寺はなそげでらといふ。程なく当寺繁昌して、元和元年十二月に後水尾院ごみづのをのの綸旨を賜ふ、今当寺にあり。洛外の所々題目の石卒都婆を建るは此日秀上人しやうなり。一宗の門俗これを巡拝するを御塔巡りといふ〕

牢岸わかみや〔若宮八幡の南、音羽川の岸をいふ。伝云、悪七兵衛景清禁獄の所なりとぞ、今牢谷といふ。此地に敷石あり、是獄屋に用る所ならんか〕

専定寺せんぢやうじ〔大仏前北側にあり、浄土宗。本尊阿弥陀仏あみだぶつは恵心ゑしんの作、六万體彫刻の内約の尊像なり〕

獅子地藏ししのぢざう〔小野篁たかむらの作。元禄の頃伏見谷左近といふ者此尊像を帰依し、ある時吾妻あづまの方へ赴くに、大井川をわたる水増て一町許漂流す、其時地藏尊は獅子と化し遂に命をたすけ給ふ。それより世の人獅子の地藏と呼ぶ〕

劍宮〔新熊野の南、林の中にあり。祭る所白山権理第一皇子〕

雲龍院〔泉涌寺の塔中なり、泉涌水の上にあり。仏殿の本尊薬師仏、坐像二尺五寸。後光嚴院、後円融院二帝の宸

影を安置す。又同所後山に後光嚴院、後円融院、後小松院の三陵あり。当院は泉涌寺より古来の塔頭なり。開基は竹嚴律師〕

来迎院〔同所方丈の北にあり、仏殿の本尊弥陀三尊仏運慶の作。又荒神を安置す、弘法大師の作、当院初めは弘法

大師、中興は智鏡和尚なり〕

独鈷水〔荒神社石壇の傍にあり、弘法大師独鈷をもつて穿ち給ふ時涌出る水なり〕

○〔当院の智鏡和尚、宋に入て懇志ある蜀の隆蘭溪来朝の初め止宿ある所なり〕

○〔信長公大坂乱戦の時、甲冑の上に懸給へる念珠小蓋を住持舜甫に賜ふ、今尚あり〕

安楽光院〔同所来迎院の西にあり。本尊阿弥陀仏。初め上京小川上立売にあり、今安楽小路といふ、是持明院基頼

卿の宅なり、後世寺となす。中興は誠蓮法師、当山再興は寛永年中にして住職微玄法師なり〕